

## ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)

群馬県前橋市元総社町七三ー五

TEL 027・2555・3434

FAX 027・2555・3435

http://www.neues-asahi.jp

会社の仕事を終え、帰宅の途中に寄るスーパーの一角に雑誌コーナーがあります。テレビのニュースで発表された芥川賞が気になりパラパラと目を通し、結局購入して読み始めました。

「異類婚姻譚」本谷有希子、「死んでいない者」滝口悠生の二作品が第五十四回芥川賞受賞作となりました。

「異類婚姻譚」は、夫婦の顔が似てくることへの気味悪さが日常生活の中で独特の空気感で表現されていて面白く読みました。

一つの展覧会で多い時は六〇〇人位の方々に会います。

ご夫婦で来廊される方、ご家族で楽しみに来られる方、一人自転車で長い距離を走って来てくださる方、会期中に何度も足を運んで下さる方……。顔を合わせ、会話を交わし、顔の表情、会話の内容、作品と向き合う姿……ちよつとした変化が気になったりもします。

「異類婚姻譚」は、会話の言葉と言葉の間に流れる「言葉のない」空気感が心地よく、ノイエスでの空気感ともよく似ているように思えました。毎日の生活でいったい何人位の人と会い、会話を交わすのでしょうか。一日中、部屋にこもり誰とも会わず、一言も話さず……、そんなこともあるかも知れません。小説で書かれるように一〇〇人一〇〇様、人にはいろいろな生活があるのですが、だからこそ小説も面白く楽しめるものだと思います。多くの友人がいても、その関係性についてはまぢまちで決して多いから良いというものでもないでしょう。

夫婦の関係、親子の関係、家族との関係、友人関係、そして職場での人々との関係、そして現在ではネット上の知らない人々との関係も発生しています。ネット社会の逆説的な発想から言えば、かえってアナログな人間関係の方が人間的であると言えるかも知れません。これからの社会では人間の思考で、その関係性をどれほどまで受け入れられるものなのか、対応できるものなのかと考えてしまいます。

何かを得ると何かを失う、そんな危険性を感じながら、毎日の生活の中で出来るだけ多くの方々と良い関係性をもち続けていきたいと思えます。一つの作品により人生の方向性を変えることもあります。そして一人の人間との出会いにより人生が変わることもあります。

若いうちは多くの人々と会い、話し、経験をつんでいくことは大切なことのように思いますが、年齢を重ねてくると、これからの人との関係性は実人生と重ねながら大切にしていきたいものです。

コミュニケーションの「場」としての意味あいは時代の流れとともにさらに重要なものとなってくると思います。

(武藤)

## ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

## 楢円展 〈企画〉

会期 三月三日(土)～九日(水)

午前十時～午後五時三十分(最終日は午後五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

作家数人が自主的に研究会をノイエスの二階会議室で開いてから二年が過ぎました。それぞれ分野の違う作家たちが毎月いったい何を話し、自己の作品制作の過程にどれほどの刺激を受けてきているのか。その答らしきものが見えてくるのか。展示作品とともに「作家は語る」の場でどんな話をするのか。多くの方のご来廊をお待ちしています。

「作家は語る」(出品作家)

三月六日(日)午後二時～

ノイエス朝日 会場にて 入場無料

## しらかわともこ個展 〈企画〉

Part 3 2003—2013

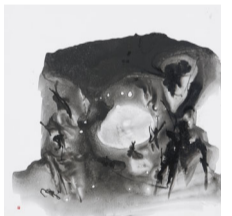
会期 三月十九日(土)～二十三日(水)

午前十時～午後五時三十分(最終日は午後五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

二〇一三年十二月二十一日に六十六歳で逝去された白川智子さんのノイエスで三回目の個展です。

夫である白川昌生氏と国立パリ美術学校で知り合ってから東京～ドイツ～和歌山～東京～群馬と生活をしながら制作を続けてきた「しらかわともこ」の最終章ともいえる作品群です。斬新な中にとことなく懐かしい温かみのある形と色彩は、誰の心にも静かに届く音楽のようで感動を覚えるでしょう。三月二十二日(火)午後三時から同会場にてコンサート(入場無料)があります。お出かけ下さい。



HIBIKI 真下京子

齋藤 泉 創作ビーズ織展2016  
光彩る「ガラスの妖精たち」

会期 三月二十五日(金)～二十八日(月)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

現在、群馬県立近代美術館で開催されている「群馬NOMOグループの全貌」展のシンポジウムで福住廉氏の基調講演「地方都市と60年代前衛美術―ジャックの会を中心に」を聞いてきました。

群馬NOMOについては、先日の「ノイエスだより」でご紹介しましたので、まだ展覧会を見てない方は出かけてみて下さい。

美術評論家の中原祐介の著書に「ナンセンス芸術論」という本があります。一九一七年にニューヨークで開かれたアンデパンダン展に出品されたマルセル・デュシャンの「泉」というタイトルをつけた白い便器。当時スキャンドルをひき起こした今でもよく語られる作品です。またその本には中西夏之や荒川修作の作品も出てきます。実際にそれぞれの作品は、目で見て、その作品に触れ(体験型)たこともあるのでショックキングで異質な身体感覚を経験したものでした。

群馬NOMOの作家たちが当時どのような考えで作品を作り、そして行動(アクション)を起こしたのか、さらに興味深いものがありました。マスコミや美術市場の流れの外で既成概念の枠から外れながらも信念を持って作品づくりをし続ける、そこに光をあてるのが今後の表現者にとってどれほど力になることか「群馬NOMOグループの全貌」を見て深く感じました。

作家にとって「今」、「自己」を表現していくことの重要性を感じます。息をして毎日制作していく、平凡な生活の中にこそ「ナンセンス」の息づかいも激しく際立ち、多くの人々の心に刻み込まれ、そして残っていくものなのだろうと……そんな思いで展覧会を見て久しぶりに心躍る一日でした。